

対唱歌の力学

岡部 隆志

1

アジアの歌文化には、相互に歌を掛け合う対唱歌の文化がある。中国の西南地域に居住する多くの少数民族には、日本の歌垣に似た、結婚や恋愛を目的にした男女の歌の掛け合いが現在も行われている。かつて中尾佐助によって照葉樹林文化論が提唱されたとき、照葉樹林帯に共通する文化の一つとして歌垣文化があげられた。^(注1)アジアにおける歌垣文化すなわち男女の歌の掛け合い文化の範囲は、現在でもほぼ照葉樹林帯と重なると考えられるが、ただ、歌が対唱的である文化はもっとひろがりを持つだろうし、対唱性の定義を緩やかに規定すれば、対唱歌文化を持つ民族はそれぞれ世界的なひろがりを持つだろう。

ここでは、日本の万葉集の歌について、対唱性という視点から考察する事を目的とする。そのことを論じていくために、歌垣文化を今に伝える中国の西南地域の少数民族の歌文化、特に筆者が調査している雲南省白族の歌掛けを手がかりに考察していく。

対唱歌は、中国西南地域の少数民族の歌文化の大きな特徴（中国では対歌と呼ぶ）と言っている。現在対唱歌の文化を伝えているよく知られた少数民族は、白族・壮族・苗族・トン族等である。

対唱歌とは、二人もしくは二組による歌の相互の掛け合いである。掛け合いは問答の形をとったり、会話のように掛け合われる場合もある。筆者が調査している白族の歌の掛け合いは、問答であったり、会話であったり、様式的な固定句の応酬であったりと様々である。本稿では、この白族の掛け合い歌を手がかりにしながら、対唱歌の力学というものについて考察し、その対唱歌の力学が、万葉歌に認め得るものなのかどうかを考えてみたい。

2

白族の対唱文化について筆者は調査を続け、その対唱性の特徴について分析をしてきたが、その中で、歌の掛け合いには、対立と協調というアンビバレンツな働きのあることを指摘してきた。^(注2)

男女が恋愛や結婚を目的に歌を掛け合う白族の対歌の特徴は、互いに相手を探り合うような歌い方（対立）と、自分と相手とが理想的な恋人であり二人の愛情の深さを確かめていくようなやりとり（協調）とが混在しながら続いていく。この協調と対立の掛け合いは、どちらかのやりとりを明らかに意図している場合もあれば、掛け合う歌それ自体が両方の要素を含む場合もある。ただ、言えることは、この協調と対立が常に繰り返されることで、互いの歌の掛け合いは、一方的な関係に収斂していかないということである。

つまり、対立すれば協調し、協調すれば対立するというように、その働きはアンビバレンツなもので、距離を縮めて親密な関係を作ろうとする掛け合いと、相手に反発したりからかったり互いの距離を離そうとする掛け合いが混じり合う。それは、掛け合いが対立する関係の距離を縮めようとする働きと、近づきすぎる関係の距離を離そうとする相反する働きを持つということでもある。恋愛や結婚という大きな流れでは互いの距離を縮めていくというストーリーが成り立つが、掛け合いという対唱歌の次元では、むしろ、互いの距離を適度に調整しながら掛け合いを持続していくように進行している。このアンビバレンツな働きによって、掛け合いは持続され長時間のやりとりが可能になるのである。

具体的な例として、2000年8月に中国雲南省大理白族自治州洱源県の橋后という小さな町の近くにある山上の観音堂で行われた歌の掛け合いの事例^(註3)を紹介したい。地元の人達は、劍川の有名な石宝山での歌会の次の日に行われることから、小石宝山の歌会とも呼んでいる。観音堂での祭りである観音会の前夜に歌の掛け合いが行われる。そこで、幾つかの掛け合いを記録したが、その中で行われた掛け合いは3時間に及ぶ長いものであり、歌われた歌は300首になる。その一部を以下にあげておく。なお、男女がそれぞれ150首ずつ歌っているので、歌番号は、その300首の中の何番目であるかを表している。

101 男

ほんとの話をいいます。あなたとつきあうのは難しいです。

私は力を尽くしてこんなにたくさん歌を歌ったのに、私の心がまだわからないでしょうか。私が欲しいのは、あなたの心を込めた愛情しかありません。他には何も要りません。

102 女

兄よ、あなたのような愛情の深い人はなかなか見つかりません。

ここで会った方がいいでしょう。もし道で会ったらすれ違うでしょう。

あなたはたぶん妻を持っていますが、私はまだ恋人を持っていません。

もしあなたが妻を持っていれば、私は他の人に噂を立てられるでしょう。

103 男

妹よ、あなたは私の心を結んで引っ張る紐です。

心を引く紐は何本かの糸で燃ったら切れません。

先程認めましたが、また同意しなくなりましたね。

あなたは先程の話を守りますか。今の話にしますか。

104 女

私の話はだいぶ前からずっと同じです。それは一本の糸のようで切ったことがありません。

私の心は真っ白です。あなたは知りませんか。

もしあなたの心がはっきり分かれば、何の遠慮もなくなります。

私の心はだいぶ前から同じですが、あなたは知っているはずですよ。

105 男

私が知っているかどうか聞いていますが、実は私はあなたのことを一番知っています。

あなたが心配するなら、私があるあなたについて行けば大丈夫でしょう。

先程同意しましたが、どうしてまた反対しましたか。

あなたが愛情ある人ならば、あなたの心には愛情があるはずですよ。

106 女

愛情のある人の話は真心のある話、本当の話であるはずですよ。

もし私と一緒に飛びたいければ鳥になって一緒に飛び立ちましょう。

私の手をしっかり取って下さい。そうすればあなたの妻が来ても別れられません。

実はあなたの心がほんとに理解できません。

107 男

あなたが行くと言えばすぐあなたについて行きます。

行きさえすればすぐに立ち上がって行きましょう。

私は一度立ち上がりましたが、あなたはまだ立ち上がっていません。

私はもうこれ以上歌いません。一緒に家に帰りましょう。

108 女

先程私はあなたに同意しましたが、あなたは真心を出していません。

私はただここで歌を歌いたいのですが、あなたはいつも外に出かけたいのですね。

どうして外に出かけたいのですか。ここで歌ってもいいではないでしょうか。

109 男

あなたはいつも出かけたくないのですね。一緒に結婚登録にいきましょう。

あなたと同じ鍋のご飯を食べればあなたは何の心配もないでしょう。

あなたはとても綺麗な人です。私も何の欠点もありません。

もし私を低く見ていなければ明日一緒に結婚登録に行きましょう。

110 女

このまま婚姻登録に行くのはせっかちではないでしょうか。

あなたがもし今勤め先の証明書を出してくれば明日結婚登録に行きます。

あなたは妻がないという証明は出せないでしょう。だから私はあなたについていくことが出来ません。

111 男

よく私の話を聞いてください。その証明書は私のポケットに入っています。

私はあなたを愛していますから、そういう証明書はもう用意してあります。

結婚登録の係は私の友人だから何の心配もいりません。

私について行って下さい。安心して下さい。

112 女

私のためにこんなにこころゆくまで考えていただいて、本当に愛情のある人です。

あなたが証明書を持っているなら、どうぞ出して見せて下さい。

あなたはもう歳がきていることを言ってません。私もまだ若いということを書いてません。あなたはもうこんな歳だから、証明がもらえないはずですよ。

113 男

山とか水とか遠回しに言わないで下さい。

わたしたちが行かなくてもほかの人たちが行こうとしているようです。

あなたがまだ心配していれば、われわれは…聞き取れず)

私が欲しいのはほんとの話です。他にはなにも入りません。

114 女

私は年がいくつかわかっていますか。私はわずか17・18歳くらいです。

あなたはわたしより何歳上ですか。

あなたは私より倍くらい年上に見えます。

もし私と同じ年齢だったら私は同意します。

115 男

あなたはまだ18歳、19歳だと聞きましたが、私はとてもうれしくてたまりません。

あなたがまだ若いなどと言いません。私ももう歳などと言いません。

真心で愛し合えば歳は何の問題もありません。

あなたはまだ若いと言っていますが、これはたぶん前世で修行した福でしょう。

116 女

今日あなたに会えたのも前世で修行した福でしょう。

私は何の条件も気にしなくて、あなたのような人が私は好きです。

私は本当のことを聞かせます。あなたは嘘をつかないでください。

117 男

私の話が嘘だと心配しているようですが、私は昔から嘘つきではありません。

あなたが同意してくれば他のことは何の問題もありません。

あなたは人を選びませんと言っていますが、私も選びません。

歳が上か下かといったことは気にしないでください。

118 女

あなたが嫌だということではなくて、あなたの妻が私の家に来ることを心配しています。

もしあなたが本当に私と同じ位の年齢だったら、あなたは今のようには見えません。もしあなた

の妻に会ったら、私はあなたの妻の妹のような年齢でしょう。

あなたの妻は必ずとても美しく私よりとてもいい人でしょう。

119 男

あなたは私は妻がいると思ってますが、そんなことはありません。

今からあなたがどこに行っても私はついて行きます。

今日はあなたを放っておきません。

120 女

あなたに妻がいなければ、本当の心があるべきです。

あなたが本当の心を見せてくれば、私の体をあげてもいいです。

あなたはあなたの心が肉だと言っていますが、私の心は肉ではないでしょうか。(肉とは愛情があるという譬喩。反対は鉄になる)

あなたの心が本当の心かどうか分かりませんが、本当の心かどうか分かってから決めます。

121 男

あなたは咲き始めるつぼみだと思っています。私は本当の心を見せてあげます。

あなたと付き合いさえすれば、あなたを他所の人とは見ません。

残念なことに私の心は胸の中にあります。そうでなければ出してあなたに見せられます。私としばらくつきあえば、本当の心でつきあっていることがわかるはずですよ。

122 女

あなたの心を取り出すことができないので、あなたの心か本当かどうか証明は出来ません。私は本当の心をあなたに聞かせます。私が一番心配しているのはあなたが私をだましていることです。

私が本当の気持ちであなたが嘘だったら、どうしてつきあうことができますか。

123 男

あなたは信じてくれないと言いますが、私も本当の心が証明できません。

病院に行って、私は胸を切ってあなたに見せましょう。

病院に行って心を見せたら、私の真心をあなたは信じてくれるでしょう。

その時あなたはわたしがいったことは本当だと信じてくれるはずですよ。

124 女

私があなただのことを信じていないとあなたは言いますが、実はあなたは本当のことをあまり言っていないんです。

今心を出して見せてくれれば信じてあげます。

病院に行って胸を切って心を出して見せても必ずしも本当の心だとは言えません。

将来一緒にいるときに、あなたの心が証明されると思います。

125 男

あなたはまだつぼみです。どんな花に咲くのか今の段階では私には分かりません。

これは謎です。今は私はあなたのことが理解できません。

私はいつもあなたのことを懐かしく思っているだけです。

私もほんとの話を聞かせます。私もあなたのことを理解しておりません。

126 女

あなたは私のことを理解出来ないと言いましたが、もう目が見えなくなったのでしょうか。

あなたは私を愛していないから、本当の愛情をくれないのです。

あなたは私のことを知っていないと言いましたが、私もあなたのことを知っていません。私はあなたにたくさんの愛情の歌を聴かせましたが、あなたはそれでも本当の愛情をくれないのですね。

127 男

妹のあなたに聞かせます。あなたの友を一人も私は好きではありません。

あなたがいい人だと私は知っています。

今まで知っていなくてもかまいません、これから話し合えばいいのです。

もし同意すればゆっくり歌い続けましょう。そうすればだんだんに知り合うようになります。

128 女

若い娘の中で私がいいとは言えませんが、私よりもっといい人がたくさんいます。

実は若い男も女もたくさんいます。わたしたちは仲良くつきあいましょう。

あなたとあなたの仲間とみんな私の村に来て下さい。

こんなにいい娘さんがいまして、みんな自分の気に入る男を捜しています。

129 男

こちらの若者はみんなとても肝がおおきくて肝の小さい人は一人もいません。

わたしたちはみな愛情が深いです。あなたたちは理解してくれると思います。

あなたたちはまだつぼみですが、咲き乱れている花でも勝手に取りません。

あなた達のつぼみはこれから綺麗に咲くと思っています。

130 女

私を知っているかどうかとあなたは聞きますが、実は私の心はしっかりと知っています。どの花もいつか必ず咲きます。咲いたら必ず実を实らせませす。

私はごく普通の花です。私は誰も嫌うことをしません。

131 男

あなたにそんなに真心があるなら、今日あなたとつきあいます。

私はあなたとつきあうことにします。今日あなたについて行きます。

他の花はいくらきれいでも取りません。あなたという花に限ります。

本当の話ですか。私についてきたければどうぞついてきて下さい。

もう少しここで歌を歌ったらもっと遅くなりますよ。

本当に行きたければ二人とも一緒に立ち上がりましょう。

あなたも立ち上がって、わたしも立ち上がってすぐに行きましょう。

(ここで男は立ち上がって女に近づき、まだ元の場所に戻る。立ったまま歌い、歌い終わると坐る)

以上の掛け合いに認められるやりとりの傾向は、基本的に300首に及ぶ全体のやりとりに貫かれているパターンである。愛情が互いにあることを確認(協調)しながら、一方では、相手の心を探る(対立)ような歌が、えんえんと続いていくのである。つまり、お互いに自分は相手に愛情を持っていることを強調しながら、しかし、相手が自分に愛情を持っているか、あるいは本気であるかどうかを疑うというスタンスで、絶えず、相手の心の真意を測ろうとするやり取りであると言ってよいであろう。

歌の掛け合いを持続していくにはこういうやりとりになる、という持続の論理をとともわかりやすく見せている例である。

109 男で、男が結婚登録をしに行こうと言えば、女は一応喜びながらも相手の歳のことをあげつらい、妻がいるのではないかと疑いの言葉を投げかける。それに対して、男は私の心は本当だと強調し、病院で私の胸を切り取って心を見せたいとまで言う。こんな風に男は女を誘い女は相手の真意を探ったり試したりするといったやりとりが続くのだが、協調と対立とのアンビバレンツな働きが機能した典型的な掛け合いである。

結婚登録をしに行こうと歌う男は歌の上では恐らく本気である。むろん、歌の上での恋愛は、演技性の上に成り立つというようにも言えるから、本気という言い方は適切でないというならば、歌の上での真剣さといってもいいだろう。が、同時に、その歌は相手の拒否を予想していないわけではない。相手がどのように返すかを予想し、それに対して返ってきた歌に対して返す歌を瞬時に思い浮かべ言葉にしていく、そういう力学の上にある本気であり真剣さなのである。

この男女は初対面であるか、あるいは狭い地域なので名前や村は知っているが、特に親しいという関係にはないようである。こういう二人の掛け合いであっても、歌の上ではまず恋愛をしている関係を作り上げて歌い合う。だから見知らぬ同士が雑談しながら仲良くなっていくというプロセスを取らない。その意味では白族の歌の掛け合いは演技的に始まると言ってもいいだろう。

従って、愛情を確認し合う歌がほとんど最初から続くのだが、仮に確認したとしても、すぐにそれを疑うやりとりがまた続く。こういう繰り返りで300首が続くのである。

白族の他の歌の掛け合いを何度も調査し、記録にとってきたが、^(註4)他の場合もだいたいこのような展開である。

むろん、男女の関係の違いによって、掛け合いにおのずと違いはあるだろう。すでにかなり愛情を深めている男女と、深めていない男女とのやりとりは違うはずである。だが、今までの調査で確認出来たことは、白族の歌のやりとりは、協調と対立との混在した掛け合いが繰り返されるということである。そのことから、言葉に込める愛情の濃淡や、その言葉の切実さに違いはあるとしても、協調と対立とが混在した掛け合いを繰り返すという歌い方は貫かれていると考えられる。

対立と協調のアンビバレンツな働きとは、歌を掛け合う二人の距離（関係）を一定に保つ作用でもあろう。この作用は、二人の距離（関係）を固定化するものではない。むしろ、近づきすぎる距離に対して反作用的に遠ざけ、遠ざかる距離に対しては距離を縮めるという、均衡を保つ緊張した力そのものということだ。例としてあげた白族の歌の掛け合いが3時間300首続いたのは、二人の歌手の距離（関係）を一定に保つ以上のような力学が作用していたからである。

このような力学は、歌垣における歌の掛け合いを持続させる力学として普遍的に取り出せるのではないか。一般的に言うなら、歌を掛け合うということは、掛け合う者同士の何らかの対立を前提とする。それは恋愛でもいいし、あるいは、共同体の内と外といった関係でも、神と人との関係でもいい。一方で、歌を掛け合うということは、その対立を解消していく方向に向かうはずであろう。でなければ、歌を掛け合うことの意味がない。対立を拡大させる目的ならあえて歌を歌う必要はないからである。

しかし、それなら、対立が解消されれば掛け合いは終わりなのか。そうとも言えるが、そうでないとも言える。歌を掛け合うことを持続させていく動力は、対立を解消させるという方向性はあったとしてもそこに向かって流れる力によってではなく、むしろ、その持続そのものをただ維持する力のみによって動いていくと言ったほうが正しいからである。

つまり、掛け合いを持続することそのものが目的になってしまう、という面がある。だからこそ、掛け合いは、未婚の男女が恋愛を目的にするだけでなく、歌をただ楽しむという目的によって掛け合われることが多いのである。恋愛を目的にしている男女であっても、むしろ、歌の掛け合いを楽しむという面がないわけではない。いや、その方の性格が強いかも知れない。歌は真剣なのであったとしてもそれは何処かでまた歌を楽しむという意味での遊びなのでもある。その区別はそれほど明確ではないのだと思われる。

対立するが対立しない、つまり、対立を作りながら融和させる、といったように、その対立を一定の距離感の中に保つ力学が、歌の掛け合いの力学として自立している。そのように考えることが出来る。とすれば、歌の掛け合いの力学、すなわち、対唱歌の力学とは、すでに一つの様式であると言える。

このような力学は、恐らく日本の歌垣における掛け合いにも働いていたはずである。「平群臣の祖、名は志毘臣、歌垣に立ちて、其の袁祁命（顕宗天皇）の婚はむとしたまふ美人の手を取りき。其の嬢子は菟田首等の女、名は大魚なり。爾に袁祁命も亦歌垣に立ちたまひき」（「古事記」清寧天皇）と、志毘臣と袁祁命は歌垣で一晩「闘ひ明して」歌を掛け合う。二人の関係を一定の距離に保つ歌の力学が働いてなければ、一晩歌い続けることは無理であろう。

恐らく、歌垣で歌の掛け合いは持続し、膨大な数の歌が歌われたであろう。そういった歌の集積の上に、万葉集の歌があるはずである。

むろん、万葉集の歌は歌垣で掛け合われた歌とは違う。が、万葉集の歌にも贈答歌があり、その贈答歌などを見ていくと、対立と協調の力学を見いだせないわけではない。

天皇の鏡王女に賜へる御歌一首

妹が家も継ぎて見ましを大和なる大島の嶺に家もあらましを

巻2・91

鏡王女の和へ奉れる御歌一首

秋山の樹の下隠り行く逝く水のわれこそまさめ御思よりは

92

内大臣藤原卿の鏡王女を娉ひし時に、鏡王女の内大臣 に贈れる歌一首			
玉くしげ覆ふを安み開けていなば君が名はあれどわが名し惜しも			9 3
内大臣藤原卿の鏡王女に報へ贈れる歌一首			
玉くしげみむまど山のさなかづらさ寝ずはつひにありかつましじ			9 4
久米禅師の石川郎女を娉ひし時の歌五首			
み薦刈る信濃の真弓わが引かば貴人 ^{うまひと} さびていなと言はむかも	禅師		9 6
み薦刈る信濃の真弓引かずして強ひざる行事 ^{わざ} を知るとは言はなくに	郎女		9 7
梓弓引かばまにまに依らめども後の心を知りがてぬかも	郎女		9 8
梓弓 ^{つら} 弦緒取りはけ引く人は後の心を知る人ぞ引く	禅師		9 9
東人の荷向 ^{のさき} の篋 ^{はこ} の荷の緒にも妹は心に乗りけるかも	禅師		1 0 0
大伴宿禰の巨勢郎女を娉ひし時の歌一首			
玉葛実ならぬ樹にはちはやぶる神そ着くといふならぬ樹ごとに			1 0 1
巨勢郎女の報へ贈れる歌一首			
玉葛花のみ咲きて成らざるは誰が恋ひにあらめ吾が恋ひ思ふを			1 0 2
天皇の藤原夫人に賜へる歌一首			
わが里に大雪降り大原の古りにし里に ^ふ 落らまくは後			1 0 3
藤原夫人の和へ奉れる歌一首			
わが岡 ^{おかみ} の籠 ^{かご} に言ひて落らしめし雪の ^{くだ} 摧 ^ふ けし其 ^ま 処 ^{ところ} に散りけむ			1 0 4

以上は、巻2「相聞」の一群であるが、歌垣でのやりとりをほうふつとさせるような掛け合いとも言える。9 1・9 2の天皇と鏡王女のやりとりでは、天皇の「妹が家も継ぎて見ましを」といった相手との距離を縮める表現に対し、「逝く水のわれこそまさめ御思よりは」と、やんわりと相手と距離を取るような言い方で返す。相手の愛情を疑うのではなく、表現の上での噛み合わなさを意図的に作り出すことで、適度な対立の距離を生み出している。一方、9 3・9 4の鏡王女と内大臣藤原卿とのやり取りは、親和的なやりとりでありながら適度な対立が歌の上で作り出されている。鏡王女は、長くいて欲しい相手に対して「わざと、相手をないがしろにして自分だけを重んじた物言いに興じ、相手の反応をうかがう（伊藤博「萬葉集釋注」集英社文庫）。それに対し、藤原卿は「生きていられないのは相手であるかのようにわざととばけて歌い返す。つまり、二人とも、朝の別れというときに、お互いの親密さを前提にしながら、相手を揶揄するような言葉の使い方で、巧みな距離感を演出している。この距離感の演出こそが掛け合いを成立させる力学になっている、と言えよう。

9 6～1 0 0の久米禅師と石川郎女のやりとり、1 0 1・1 0 2の大伴宿禰の巨勢郎女のやりとりは、典型的な繰り返し歌のやりとりである。

これらの繰り返し歌は、やはり親密な関係を前提に歌の上で対立をあえて作り出す歌であると言える。これらのやりとりは、例にあげた白族の歌の掛け合いによく似ている。一方が相手を誘う歌を歌えば、他方は相手の歌に対して真意を疑うように切り返す。その対立の作り出し方がよく似ているのだが、このような恋愛を主題とした歌のやり取りにおける力学は、繰り返し歌において明瞭に機能す

るということであろう。特に久米禪師と石川郎女のやりとりが他の贈答歌に比べて持続しているのは、掛け合いにおける歌の力学が効果的に働いているからだと言える。

103・104も、相手をやり込める切り返しとはいかないまでも、103の天武天皇の歌に対し104の藤原夫人の歌が、『大雪』に対しては『雪のくだけし』といい、『降る』に対しては『散る』とあって、相手のものを過小にとらえることで減らず口を叩いている」（伊藤博『萬葉集釋注』）といった切り返しになっている。

以上見てきたようにこれらの歌のやりとりは、互いに親密な関係を前提としながら、その距離感にあえて逆らい適度な距離を作り出す言葉のやりとりに満ちている。そういったある距離感を作り出す作用とは、ここで述べている、対唱歌における歌の力学であると考えられる。

ところが、万葉集の歌の中で、こういった、対唱歌の力学と思われるものが見て取れる切り返し歌の贈答は例が少ない。万葉歌における恋歌は、ほとんどが、相手の不在を前提とした歌である。例えば巻2相聞歌の冒頭は次のような歌である。

磐姫皇后の、天皇を思ひて作りませる御歌四首

君が行き日の長くなりぬ山たづね迎へか行かむ待ちにか待たむ	巻2・85
かくばかり恋ひつつあらずば高山の磐根し枕きて死なましものを	86
ありつつも君をば待たむ打ち靡くわが黒髪に霜の置くまでに	87
秋の田の穂の上に霧らふ朝霞何処辺の方に我が恋ひ止まむ	88

磐姫皇后の歌と題詞にあるが、諸説が説くように磐姫皇后に仮託して構成された歌群とみていだろう。これらの歌の特徴は、不在の相手を待つ歌であり、待つこちら側の心の揺れを歌っている点である。ここだけを取り出せばすでに歌の掛け合いにおける力学とは関わりない、と言える。ここで提示されている歌は、ただ相手を待つ側の歌であるからだ。が、そうであるにしろ、歌のやりとりという状況が想定されていないわけではなく、ただ、相手の歌が載せられていないだけだと見ることも出来る。万葉集の多くの歌は、たとえ、独詠歌として載っていても、贈答歌の片方であってもおかしくはない歌が多い。また、万葉集の歌の多くは一人で孤独に歌ったというよりは、歌のやりとりを前提とする贈答歌や宴で披露された歌であると考えられる。とすれば、歌垣での眼前にいる相手との直接的な歌のやりとりではなくても、歌のやりとりにおける力学が全く働いてないとは言えない。

とすれば、磐姫皇后の4首を、歌の力学が働いている歌であるとみなすことは可能なはずだ。そのように見てみると、これらの歌は対立を強調するような切り返し歌ではなく、相手のいないことを切実に嘆く歌であるのだから、むしろ相手との融合つまり協調を期待する歌であることがわかる。とすれば、力学はどのように働いているのか。実は、これらの歌の前提として、歌う相手は遠地にいてここにはいないのであるから相手との距離がすでに最大限に離れてしまっている。だからこそ、待つ側では、歌において相手が来ることを待つ（つまり相手との距離を縮めようとする）歌を歌うのである。

歌のやりとりにおける力学を、歌垣的な場に限定せずに、広範な意味でのやりとりにおける歌の性格を方向付けする作用ととれば、これらの歌は十分にその作用を受けていると言えよう。

例えばそのような力学が典型的に働くのが、旅における男女の問答歌である。

中臣朝臣宅守と狭野茅上娘子との贈答の歌

あしひきの山路越えむとする君を心に持ちて安けくもなし 卷15・3723
君が行く道のながてを繰り重ね焼き亡ぼさむ天の火もがも 3724
わが背子しけだし罷らば白妙の袖を振らさね見つつ思はむ 3725
この頃は恋ひつつもあらむ玉匣明けてをちより術なかるべし 3726

右の四首は、娘子の別に臨みて作れる歌

塵泥の数にもあらぬわれ故に思ひわぶらむ妹が悲しさ 3727
あおによし奈良の大路は行きよけどこの山道は行きあしかりけり 3728
うるはしと吾が思ふ妹を思ひつつ行けばかもとな行きあしかるらむ 3729
恐みと告らずありしをみ越路の手向に立ちて妹が名告りつ 3730

右の四首は、中臣宅守の上道して作れる歌

この中臣朝臣宅守と狭野茅上娘子とのよく知られた問答歌は、都にいる狭野茅上娘子と旅の途中峠にさしかかった中臣朝臣宅守との問答であり、二人の間には、大きな越えがたい距離がある。しかも、中臣朝臣宅守は流刑の旅であり、二人の間に横たわる距離はかなり深い。とすれば当然互いの歌はこの距離を縮めようとする力学のもとで歌われることになる。そして、二人は、そのような力学に従って見事なまでに相手を思いやる歌を歌っているのである。

むろん、このように歌うのは対唱歌の力学なのではなく、情愛によって結ばれた人間関係の力学なのであって、ことさら歌の力学と言う必要はない、という意見もあるだろう。確かに、情愛によって結ばれている男女が、逢えなければ逢うことをこいねがい、親密に逢っていれば、適度にからかい戯れることはよくあることであり、そういった心理の機微に過ぎないという見方もあろう。だが、ここであえて力学というのは、そういった心理の機微によって説明出来る力学が、歌という言語表現の様式としてあるからなのである。一定の様式性を持つ歌という言語表現は、そういう心理の機微によって成立するのではない。歌という言語表現の蓄積の上に成立するものである。

つまり、ここで言う力学は、心理の作用反作用といった物理的にとらえた心の動きではなく、歌を歌たらしめている様式としての力学のことである。

中臣朝臣宅守と狭野茅上娘子は心理のしからしむるところに従って歌ったのではない。この様式としての力学に沿って歌ったのである。

4

以上見てきたように、万葉集の歌を検討してみると、対唱歌の力学が働いているように思われる。だが、万葉集の歌と実際に歌垣で交わされる歌とは違う。大きな違いは何と言っても、歌垣の場面で歌のやり取りが、歌を持続させるものであるのに対して、万葉集の歌をそのようなレベルに於いてとらえることは出来ないということだ。この違いは決定的であるとも思われる。

歌のやり取りが持続するということは、歌が即興的であり、常に現在的であるということだ。現在のというのは、表出された歌は、そこで固定されるのではなく、次の歌のために瞬間に消費されてしまうということである。そうでなければ歌のやり取りは持続しない。だが、万葉のレベルになると、歌は、瞬間に消費されることを当然としていない。だからこそ、文字に記述される歌であり得るのである。

この違いは、歌のやり取りにおける対唱歌の力学をもまた違ったものにしてしまうと考えられる。

歌垣的意味合いでの持続性はすでに万葉の歌にはない。が、力学はすでに歌の様式として歌に内在されている。持続性がなくても、親密すぎれば距離を取るように歌い、相手が不在であれば、その不在を解消するように歌うのである。そのことは確認してきた。だが、そこで機能している力学は、歌の掛け合いという意味での持続を保証しないということなのだ。

これをどのように考えたらいいのか。

万葉の歌、特に短歌は、それ自体完結しない様式である。そのことが、万葉の歌のレベルにおける持続性というものなのではないか。

古橋信孝は短歌謡について次のように述べている。

長歌謡が神々の事跡をうたうゆえに歌詞が固定的であるのに対して、短歌謡は心のほんの一部うたうにすぎないものゆえ最初から固定的でないのである。これは短歌謡が現在をうたうものでもあることである。^(註5)

古橋信孝が述べるように、短歌謡は心のほんの一部を歌うものである。だから、変化する現在を歌うことが出来る。だから短歌謡は掛け合いによって交わされる歌に適している。この短歌謡が、万葉の段階になると短歌という形式に整えられてくるが、そのことは決して「心のほんの一部をうたう」ことを失なったということではない。むしろ、心の一部を積極的に歌うことが、歌を構成する条件となったということであろう。それは、短歌という様式の歌が未完結なものとして自立した、ということである。

心の一部を歌うことは、心の欠落部分を逆に表出することである。とすれば、その欠落部分は埋められなければならない、というように表出された歌は訴える。それが未完結であるという意味である。つまり、歌うことは、すでに掛け合いを前提としていなくても、その歌が完結していないことによって、歌われた歌の欠落を埋めていく次の歌を必要としてしまう。その次の歌は現実に歌われなくてもよい。歌い手の中で繰り返される沈黙の歌でも、あるいは聴き手の心の中で繰り返される歌でもよいのだ。これが万葉における持続の論理なのである。

歌が掛け合われているとき、確かに、心の一部を歌っていたらう。だが、まだ欠落部分を表出するというような所謂自己表出の段階には達してなかった。繰り返され持続される歌の言葉のシンフォニーそのものが、そこでの歌の全てであったと思われる。

が、万葉の歌の段階になると、広い意味での歌のやりとりはあるにしても、歌垣的な掛け合いやその持続は失われる。未完結である歌は、未完結であることで欠落部分（言語化出来ないもの）を表出する表現の様式性を獲得する。抒情詩の成立である。

万葉の相聞歌の多くの歌が不在の対象を歌うのは、歌が未完結な表出であることと対応しているだろう。相手が今此処にいないその欠落（距離）を埋めるように歌う。そのとき、何故居ないのかも、何時戻るのかも、説明されなくてよい。大事なのは、相手が今居ないという現在の状況であり、その状況のなかの揺れ動く自分の心を表出することにある。そのように歌うことで、歌そして心の一部は、次の歌もしくは心の一部に、別の言い方をすれば次の現在に投げ出されるのである。そのように非完結な歌が次々と現在という時間を構成していくのである。

対唱歌の力学は、実態としての掛け合いを失った歌に内在し、歌を未完結な表出として構成していったのだ。

白族の歌の掛け合いから抽出した対唱歌の力学は、日本の歌垣における歌の掛け合いの力学として

も取り出すことが出来、以上のように、現在という時間に投げ出された心を綴っていく万葉の歌の形成に大きな働きをなした。そのように考えている。

注1 中尾佐助『栽培植物と農耕の起源』岩波書店1966年。

注2 岡部隆志「歌垣をめぐる」『恋の万葉集』高岡市万葉歴史館論集編所収。笠間書院。2008年3月。

注3 岡部隆志「繞る歌掛け—中国雲南省白族の2時間47分に渡る歌掛け事例報告—」共立女子短期大学文科紀要49号、平成2006年1月。

注4 現在翻訳されている白族の歌掛け資料は次の通りである。

①工藤隆「現地調査報告・中国雲南省劍川白族の歌垣（1）」（大東文化大学紀要第35号1999年3月）

②工藤隆「現地調査報告・中国雲南省劍川白族の歌垣（2）」（大東文化大学紀要第37号2000年3月）

③工藤隆・岡部隆志共著『中国少数民族歌垣調査全記録1998』（大修館書店2000年6月10日）

④岡部隆志「何故歌うのか—中国少数民族の事例から」（『古代文学』41号古代文学会2002年3月）

⑤工藤隆『雲南省ペー族歌垣文化と日本古代文学』（勉誠出版2006年6月）

注5 古橋信孝『幻想の古代』（新典社1989年）